

第3報告

農村生活の変容からみた20世紀システムー新しい変革主体形成と農家家族の変化ー 農林水産省東北農業試験場 川手督也

日本の農業・農村が危機に直面しているとの指摘がなされるようになって久しい。しかし、ミクロ的にみると、従来と異なる新しい価値観=共生的・共同社会的価値観に基づく実践が、多様な主体により様々な形で各地に登場しはじめている。これらの実践は、端的に農業・農村の可能性を示していると考えられる(1)。

そうした中で、地域に密着しながら農業・生活の両面に携わりつつ、生活者の視点を豊富に有する農村女性に対して、変革主体としての期待が寄せられている。

今日、農村地域でリーダーとして活躍している女性は、40・50歳代で、いわゆる戦後民主化教育世代である場合が多い。また、彼女たちは、農家出身か否かにかかわらず、結婚後はじめて農業に携わり、本格的な就農は子育てが一段落した30歳代以降である場合が多く、結果として、農業・農村の危機的状況の深化と並行するように主体形成を図ることになった。今日における彼女たちの取り組みは、領域的には、自分の家の農業・生活のみならず、農村地域、さらには都市サイドまで広がっている。内容的には、狭い意味での農村女性の地位の向上のみならず、産直、直売、伝統文化の継承や新しい生活文化の創造、地域づくり、地域資源管理、環境問題への対応、都市住民や消費者との交流など、生活者の視点を生かした多様で幅の広いものとなっている。エンパワーメントの面でも、市町村農業委員さらには市町村会議員に自分たちの代表を送り込む運動が各地ではじまっている。彼女たちの取り組みは、当初は、相互研鑽的で内向きなものであったが、近年は、男性や地域、さらには、都市を巻き込んだ外向きで高い社会性を帯びた取り組みに変質してきており、世の中を徐々にではあるが着実に変えていく力となりつつある。注目すべきことは、彼女たちの実践が、農村生活の基礎をなしている農家家族や農村地域社会のあり方を大きく変えてきていることである。

そこで、本報告では、第1に、彼女たちの主体形成の過程、すなわち、彼女たちが農業者および生活者としてのアイデンティティを確立し、農家家族や農村地域社会のあり方を変えてきた、あるいは、変えようとしてきた過程を分析し、特に、農家家族の変化のトレースを試みたい。第2に、今日における新しい変革主体形成と農家家族の変化を、外部環境の変化を踏まえつつ、歴史的に位置づけると同時に、今後の農村生活のあり方を展望することを試みたい。その際、①家族の変化を個人（主体）や地域社会などの関係性において捉え、②いわゆる家父長的な家族関係のみならず、フェミニズムが提起する性差別の問題を真正面から考察するため、落合恵美子の近代家族論の枠組みを援用する(2)。

注

- (1) 宇佐美繁, 1999, 農村地域社会の変貌と政策ニーズの枠組み, 農村地域社会の今後の動向と必要な行政ニーズに関する報告書, (財)農村開発委員会等参照。
- (2) 落合恵美子, 1989, 近代家族とフェミニズム, 効果書房等参照。